

メンデルスゾーンとアングルによる カメラルシダ利用と描画の特質

愛知淑徳大学
小田茂一

ドイツロマン派の作曲家メンデルスゾーン（1809～47年）は音楽にとどまらず、13歳頃から亡くなる直前まで、ヨーロッパ各地での鉛筆や水彩によるスケッチを数多く遺している。これらはいずれも縦横33cm以内のサイズにとどまり、構図上の共通性などからもカメラルシダ（camera lucida）を使っただけの描写を推定させる。眼前に広がる光景を紙面上に写し出すこのドローイング機材は、1806年にイギリス人ウィリアム・ウォラストン（1766～1828年）により発明された。19世紀前半の富裕層のあいだでは、カメラルシダの写像をなぞることがスケッチとなった。

ネガからポジを複製するカロタイプ写真を発明したタルボット（1800～77年）や、ポジ・ネガの概念を提唱したジョン・ハーシェル（1792～1871年）など多くの文化人がカメラルシダに取り組んだが、タルボットはうまく描画に使えず、写真術の発明へと向かった。また、古典主義の巨匠ドミニク・アングル（1780～1867年）も、いち早くこの図像作成装置を試した。アングルのスケッチでは、カメラルシダ写像の輪郭に目印となる点を打っているとデイヴィッド・ホックニーは指摘している。アングルが1808年のサロンに出品した『ヴァルパンソンの浴女』（1808年 油彩 ルーヴル美術館蔵）や肖像画『ルイ＝フランソワ・ベルタン』（1832年 ルーヴル美術館蔵）とそのデッサンなどでは、胴体の長さや膨らみが強調されている。カメラルシダによる像をトレースした場合、描線の繋がりに特徴がある。たとえばベルタン像では、上衣の裾と椅子の背の位置関係、スラックスに置かれる手や肘の曲がりようなど、ファインダー内の紙面に写る平面性が強い像をなぞったことを示唆する主体性の弱い輪郭線によって描出されている。このデッサンの本画についてベルタンの娘は、父本来の風格を感じさせない肥満体に描かれていると非難した。

メンデルスゾーンは、カメラルシダを使うスキルを、姉ファニー（1805～47年）の夫で肖像画家のヴィルヘルム・ヘンゼル（1794～1861年）から受けたと推測する。ヴィルヘルム・ヘンゼルは、ファニーをさまざまに描いているが、いずれも足先へと極端に細くなっていたり、画面周縁部を省略したりと、カメラルシダによる見え方の特徴が表出されている。メンデルスゾーンのスケッチにおいても、多くは『スペイン階段近くのバルトルディ家』（1831年）にみられるように、近景から遠景への広がりや、立体視ではなく平面上に並置された事物の輪郭をなぞったように描かれている。

写真術が発明される前後、写真は絵画ときわめて連続性の強い表現として意識されていた。アマチュア画家メンデルスゾーンとこの時代の代表画家アングルというふたりのカメラルシダの使い手が、どのように作画にその像を反映させているのかを分析し、近代アートへの過程における図像と写像の連関性を考察する。